

作物名：トマト

病害虫名：灰色かび病（病原：*Botrytis cinerea*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 果実、花弁、葉などに多く発生するが、莖や葉柄にも発生する。
- 果実では、咲き終わった花弁に灰色のかびが密生し、花落ち部分から果頂部に広がり、被害部は水浸状となって軟化腐敗する。ホルモン処理をした場合は、花殻ががく片部に留まるため、がく片周辺から果実に感染し水浸状となって軟化腐敗する。
- 葉では、葉先枯れ部分から寄生して、淡褐色水浸状の病斑が葉身内部に広がり褐変枯死する。また、葉身に落下した花殻に寄生して、そこから葉身に病斑が広がり褐変枯死する場合もある。
- 莖では、淡褐色～暗褐色で長楕円形の大型の病斑をつくり、病斑が莖の周囲を取り巻くと、そこから上部の莖葉は萎れ、やがて枯死する。
- 病斑部はいずれも灰色のかびを生じるが、多発している施設内では緑色の果実にしばしば直径が1～2mmのゴーストスポットと呼ばれる白いリング状の病斑を生じる場合がある。



写真1 果実の病斑

2 伝染源・伝染方法

- 本病菌は被害植物に形成された菌糸、分生子、または菌核で越冬して第一次伝染源となる。また、有機物などで腐生的に繁殖、生存が可能のため、有機物の腐敗残渣も第一伝染源となりうる。
- 二次伝染は、被害植物の病斑上に形成された分生子の飛散により繰り返される。

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で、不完全菌類に属し、分生子と菌核を形成する。
- 菌の発育適温は23℃前後であるが、発病適温は20℃前後のやや低温と多湿条件で多発しやすい。
- 施設栽培では、外気温が低くハウスを閉め切る時間が長くなる11月～4月に発生しやすい。
- 本病菌は多犯性で、なす、きゅうり、イチゴ、レタス等、多くの野菜、花き、果樹類を侵す。

4 防除方法

- ハウス内が多湿とならないよう、こまめに換気を行う。
 - 果実の花落ち部からの感染を防ぐため、花殻落としを行う。また、発病部位は二次伝染源となるので、ほ場外へ持ち出して処分する。
 - 薬剤耐性菌が発達しやすいため、薬剤防除は異なる系統の薬剤によりローテーション散布する。
- ※ 薬剤防除にあたっては耐性菌の発生を防止するため、同一系統薬剤の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。特にQoI剤及びSDHI剤は、耐性菌の発生リスクが高いため、それぞれ単剤または相互の混用、混合剤を使用する場合は1作1回まで、効果が期待できる他成分を含む薬剤との混用の場合は1作2回までとする（下記ガイドライン参照）。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編2-①（農文協）
- 農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）

- 野菜・果樹・茶における QoI 剤及び SDHI 剤使用ガイドライン（日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会 <http://www.taiseikin.jp/guidelines/>）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 葉の病斑



写真3 茎の病斑

（令和5年9月改訂）